

図画工作科と他教科等との関連で育成する創造性 —パッケージデザインの表現に着目して—

曾我 市太郎（学術研究所・講師）

はじめに

中央教育審議会答申では、これからの時代に求められる資質・能力を育むために、教科等横断的な視点に立った学習の重要性が述べられてきた。また文科省においては、STEAM教育等の各教科等横断的な学習の推進が謳われ、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲の各教科等による学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習を推進している。本稿はこうした背景から、初等教育で実現が可能な内容を抽出・整理し、その具現化に向けて行った、鎌倉女子大学初等部4年生における図画工作科（以下、図工科）の題材「おいしいを伝えよう！パッケージデザイナー」の授業実践に基づく研究である。本実践での取り組みは、図工科として単独の教育内容に終始せず、学習の主体者である児童がこれまで培ってきた各教科等の内容や方法を活用し、図工科の表現活動と関連付け融合させることで、美術的な意味だけでなく、ものごとを創造するためのデザインの能力が育成されることの可能性についての考察である。

1. 研究の目的と背景

1-1(1) 研究の目的

本研究の目的は、これからの時代に求められる人間形成の在り方を受け、図工科の題材における教科横断的な知識・技能の弾力的な活用から、社会における汎用的な諸能力への発展を目指すことである。そのために、造形表現活動を通じた問題解決力の働きに着目して、鎌倉女子大学初等部（以下、初等部）での授業実践を基に教育的可能性の実証を目指した。

1-1(2) 研究の背景

児童にとって、初等教育段階から自分の生活環境や社会全体に目を向け、そこから見える事象から情報を感じ、思考を働かせ、既存の知識や技能を統合させること、そして、問題を解決する力を通して自らを成長させる経験を積み重ねていくことは、とりもなおさず人間形成の根幹であるといえる。これを具現化していくために、学校教育における様々な教科等の学習や、多様な生活体験がたゆまず織り成されていく。筆者が指導を受け持つ図工科では、単科としての教科目標や内容に基づき、学校や児童の実態をふまえた指導の指針を立て、それを授業として実施するなかで、前掲の中教審答申(2016)が掲げ持つ「教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれる資質・能力」における「生涯にわたって学び続けるための学習の基盤」をどうデザインして授業を行うかを探究してきた。中教審答申で謳われる「見方・考え方」という概念は、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や

考え方である。これを支えるのが、日々身に付けた知識・技能、思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力、人間性等であり、それを人生の様々な場面で発揮するという循環を積み重ねていくことが将来のライフステージを生き抜くための基盤となる。これらの働きは教育や体験を通して積み重ねることで鍛錬されるため、初等段階でのあらゆる教育活動を通して培わなければならないと考えられる。

「STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進について」(2021)では、学習指導要領における学習の基盤となる資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされている。現在、文科省が推進しているSTEAM教育等の教科等横断的な学習は、小学校、中学校、高等学校などの各教科等の学習が重要であるとし、各学校において、習得・活用・探究という学びの過程を重視しながら、各教科等において育成を目指す資質・能力を確実に育むとともに、それを横断する学びとしてのSTEAM教育等を行い、更にその成果を各教科に還元することの重要性を説いている。

こうした理由を受け、図工科において社会を意識できるようなアプローチ方法は何かと考えた結果、児童にとって身近で親しみを持つことができ、生活環境をイメージしながら創造性を発揮できるよう、食品の包装デザインを考え、表現する題材である「オレンジジュースのパッケージデザイン」の授業実践を想起した。

現在、授業の実態としては、小学校学習指導要領(2017)の示す標準時数に基づき営まれる教育課程編成の関係上、図工科は週に1回(45分授業1～2時間)という時間数であり、造形表現をメインとする学習内容も相まって、多くの児童にとり「特別な感じ」のある教科と捉えられている。それゆえ、授業計画の精度を高めて実施しても、次回授業は1週間後という間隔が生じ、断片的な体験になりがちなのが学習の定着の弱さを生むのではないかという問題意識を持っていた。そのため、図工科と他教科等と関連付ける要素に注目し、有機的かつ総合的に学習を繋げ、図工科の学びを確かなものとして深めていく必要性を感じていた。

1-3) 本研究で考えるデザイン

一般的に、デザイン〔design〕という言葉は、「下絵、素描」「図案、意匠」という美術に関わる語義のほか、建築や服飾、グラフィックなどの専門性の高い知識やセンスを求められる特殊な領域として認識されているのではなからうか。しかし、これは美術のためだけの言葉ではなく、もとはラテン語の〔designare〕から派生した「計画する、設計する」という語義の通り、広義には、なしとげようとする事物や行為のための準備・計画の決定過程を指す〈中略〉や、「目的に向けて計画を立て、問題解決のために思考・概念の組み立てを行い、それを可視的、触覚的媒体によって表現すること」という定義などを参照し、初等教育段階の4年生を対象とした本研究では、「広くアイデアを考え、ひとつの形にまとめていくために自らの思考や感覚を働かせ、問題解決のために計画を立て表現すること」と位置付けた。我々の生活に満ち溢れている様々な「モノ」は、必ずその製作にあたってデザインした作者が存在するという視点に立ち、他者を尊重する意識の醸成もねらいとする。なお、デザインの領域においてパッケージデザインは、「プロダクトデザイン」に分類される。

幅広く知識・技能を働かせるために、各教科の学習や行事、日常の体験で培ってきた様々な能力は、「使ってこそ生きる」ものである。眠らせておくのではなく引き出すこと、自分自身の能力のコントロールすることもデザインのひとつであると考えられる。デザインを多角度から考え、表現できる内容を教材化することで、児童が自らの能力を引き出す機会にしていくことは教師の重要な役割である。

1-(4) 先行研究

教科横断的な学習についての先行研究のなかで、吉岡・栢森(2021)は、教科特有の「内容」以外の「考えるための技法」に着目し、方法知の獲得による教科の枠を越えて活用できる力の研究成果があったことを実証している。高橋・村上(2021)は、特別支援学校の美術科における教科横断的な視点に基づき、日本の美術作品(屏風)の鑑賞を通じた学びの促進と定着の効果を報告している。石山(2020)は、美術科の授業を基軸に教科横断的な取り組みを実践し、「自己表現」から「自己有用感」への育成につながる研究を行っている。

本研究では、先行研究では扱われていないパッケージデザインの造形表現と他教科等との横断的な関連性やワークシートの活用に主眼を当て、その教育的な可能性を探る。ワークシートの活用については多くの先行研究があるが、蛭名(2010)は、美術科における鑑賞の授業で生徒の関心や態度、思考を知る手立てとしてワークシートを活用した事例を報告している。

以上の事例を鑑み、本研究の目的に迫るため、初等部4年生を対象に授業実践を行い、教材としての有効性を検討した。そして、代表的な事例の紹介をもとに、作品とワークシートの記述内容から考察を行った。

1-(5) 題材設定の理由

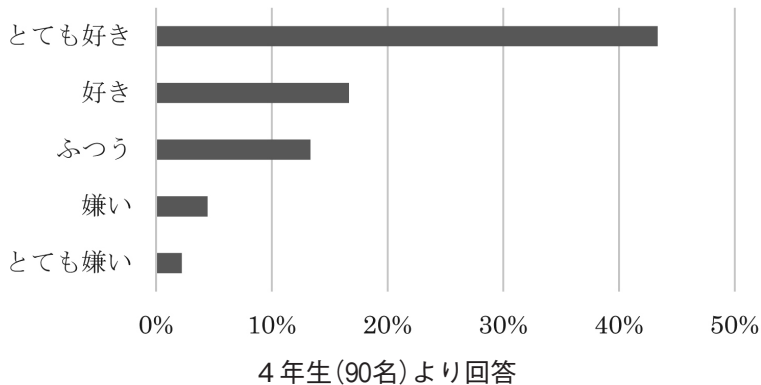
本研究では、「オレンジジュースの紙パックの造形表現に基づく多様な学びを生かしたデザインと創造性」を実現するために考案した題材を扱う。その設定理由のひとつとして、デザインの視点から社会を考えることである。日常的に親しみがあり、自分の生命を支える食品を対象とすることで、相対的な社会を想像する感性に灯をともし、創造力の活性化に繋げる。それは、自らの感性や知識・技能を有機的に発動させ、隠れている諸能力を育成するためでもある。図工科という範囲にとどまらず、社会を見る窓口としてのデザインから、感受と表現、言語イメージと視覚イメージの往還を重ね、使ってこそ磨かれる能力があることを考えさせたい。ものごとを計画し、実現させていくデザインの能力を作品として可視化できることは、図工科の利点である。これを実現するためには、小さな点をつなげて線にして、面から立体へと質量を増やすように、作品とともに児童が自身の資質・能力を育てていく意識と指導者との協働が不可欠である。

1-(6) 題材における2つの視点

視点①: ジュースの原料はオレンジまたはみかんの果汁100%とした。かんきつ類は世界で最も多く生産されている果物で、オレンジは約3000年前に東北インドとビルマ(現ミャンマー)地方が起源で世界各地に広がった。日本には中国や東南アジアから伝わり、

温州みかんなど独自のものが生まれた。世界的な流通シェアからも、果汁100%のオレンジジュースの生産状況は他の果汁飲料と比べて多く、幅広い年齢層や条件の人から好まれている普遍性の高い飲料である。児童にとって、オレンジやみかんは生食も含めると一定の食経験があり、形状や味、香りのイメージを想起しやすいことも理由のひとつである。食品であるゆえに味覚や嗜好の条件に個人差があるが、結果的にはすべての児童がこの題材を受け入れ、学習に取り組んだ。【表1】

【表1】 オレンジやみかんは好きですか



イメージを広げるための支援として、写真や図書資料、オレンジ果実や紙パック入りの果実ジュースの実物を適宜提示した。なお、4年生の社会科では海外諸国が学習対象として扱われていないため、筆者が統計等の資料を示した。現在は、中国、ブラジル、アメリカが生産量の上位国である。また、日本では和歌山県、愛媛県、静岡県が上位の生産県である。これまでに積み重ねた学習を自分で生かす方策を考えるというデザインの視点から、4年生で学習した47都道府県ごとの特徴的な産地の知識を活用することもできるため、国産のみかんジュースにしてもよいという幅を設けた。本稿では便宜上、みかんジュースも含めて「オレンジジュース」と一括りで表記する。

視点②： 図画工作教育で使う用具・材料は、普遍的であることが大切であるため、基底材は厚手の白画用紙を選択した。紙のもつ役割には、書く、刷る、包む、拭くなどがある。実践での紙パックは空洞であるが、商品としてはジュースという液体を物理的に保存し、社会に流通させ、関心を誘発することで消費者の手に取られ、購買に繋げるための要素が総合的に考えられている。とりわけ「視覚的に伝達する」という点にデザインの担う面があり、商品の流通やそれを手に取る人を想像する活動を通して、社会と繋がる喜びを学んでほしいと考える。2次元の平面にレイアウトを描いて終わりではなく、「組み立てる」行為を入れることで、デザイナーとしての当事者意識を持たせ、つくりだす喜びを高めることができる。パッケージは「包む」ための容器であるだけでなく、そこに内容物、商品名、価格、成分表示、キャッチコピーなど文字情報とともに、全体像としてのデザインがある。実践では、他教科等の学習と関連させ、形や色、文字という造形要素として使うことで学びの定着と深化を高めることができると考えた。例えば、社会科で学んだ47都道府県ごとの農作物の生産について、オレンジやみかんなどのかんきつ類は温暖で日照に

恵まれた地域で生産されるという知識や、英語科における言葉の意味の理解や文字の表記、総合的な学習の時間で行った「環境」をテーマにした多面的な学習などの活用が考えられる。

消費者の視点に立つと、購買行動としてはまず商品棚に並ぶ複数のジュースから目当てのものを選び、表示から内容を確認するなど、視覚や触覚を用いた識別意識が働くであろう。そして、飲みながらデザインの印象を感じ、そのジュースをよりおいしく味わうという連鎖により、視覚から入る情報が味覚の向上にも一役買っているのではないだろうか。視覚と味覚が一体に働くことで、単に喉の渇きを潤すだけでなく、精神的にも充足感を抱くのではあるまいか。パッケージデザインにはこうした役割もあるため、児童には、人に豊かさをもたらすものとして「デザイン」を捉えてほしいと考える。

2. 研究方法

2-1) 研究の概要

本題材「おいしいを伝えよう！パッケージデザイナー」の実践から、児童の取り組みにおける様子とワークシート、完成作品から研究を行った。好奇心や知能が向上し、社会への視野が広がる中学年という発達段階にある児童自身が、「パッケージデザイン」というものをどう捉え、他教科等の学習をどう関わらせ活用しているかを3種類のワークシートへの記述などから振り返る。

パッケージの規格は筆者が考案したもので、正面の幅6.5cm、高さ10.3cm、奥行き4cmの図面を、厚手の画用紙に【図1】を印刷し、【図2】のように直方体に組み立てる仕様である。今回は便宜上、規格を統一したが、同じ型にすることで児童の感性や描画表現などの個性の違いがあえて際立つと考えた。

他教科等を生かすことについては、①教科を指定しないが文字や言葉を有効に使う、②パッケージデザインから社会のことを考える、③自分の感覚やイメージを表現するために使う画材や技法の幅を広げる、の3点を特に強調し実践に臨んだ。

ワークシートについては、図工科でも言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を育成する観点が必要視され、感じたことや考えたことを言葉で整理するなどが求められている理由からも、3段階に分けて活用した。また制作中には、対話などを通じて児童の内面を理解する場面を設けた。

2-2) ワークシートの内容

ワークシート1（制作前）の問い

- ①オレンジの「味やにおい」をイメージすると、どのような言葉や色が浮かびますか。
- ②デザインのイメージは、リアルーシンプル。あざやかで強いインパクトー自然でひかえめ。（該当項目に○を付ける）
- ③デザインのレイアウト（アイデアスケッチ）

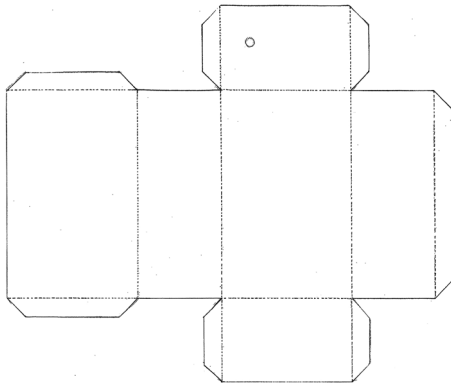
ワークシート2（制作後）の問い

- ①図工の学習以外に、どの教科の学習を生かしましたか。（選択肢）複数回答可
- ②デザインする時、特に大切にすることは何か。（選択肢）複数回答可

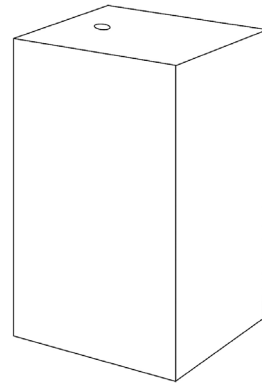
③どのようなキャッチコピーにしましたか。(自由記述)

ワークシート3 (制作後) の問い

- ①オレンジやみかんの好き嫌いについて。(選択肢)
 ②社会や相手にどう感じてもらいたいと思いましたか。(自由記述)
 ③なぜ、図工でも他の教科の学習を生かすことが大切だと思いますか。(自由記述)
 ④オレンジ色を見るとどんな気持ちになりますか。(自由記述)



【図1】 パッケージの展開図



【図2】 組み立てた状態

2-(3) 本題材と一般的なジュースの紙パッケージとの違い

	本題材	一般的なジュースの紙パッケージ
紙	非耐水性の図画用紙	ポリエチレン加工で液の浸透を防ぐ液体用の紙
表現手法	色鉛筆等による手描き表現 コラージュや写真印刷はしない。	企業及び専門職によるデザイン 産業用インクによる写真やイラスト等を紙面に印刷する。
形成	手で折り糊付けして組み立てる。	機械による罫線で表抜きをして組み立てる。

3. 図画工作科と他教科等との関連

3-(1) 見方・考え方について

各教科の目標・内容等の項目から、主に中学年の項目に示された教科横断的視点から図工科と関連性の高い箇所を精選して述べる。

前述した中教審の答申に基づいて作成された各教科の学習指導要領解説(2017)(以下、学習指導要領)には、各教科等の冒頭に「～見方・考え方を働かせ」という文言が置かれている。図工科の目標では「造形的な見方・考え方を働かせ」ることが示されているが、他教科等においても、例えば社会科では「社会的な見方・考え方を働かせ」ることが明示されている。この「見方・考え方」について、学習指導要領では次のように述べている。

各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。

つまり「見方・考え方」は、単元等で育成を目指す資質・能力そのものではなく、資質・能力をより確かに育むための枠組であると捉えることができる。

3-2) 図画工作科の目標と内容

『小学校学習指導要領解説 図画工作編』(2017) (以下、図工科指導要領)において、図工科の主な目標は、表現と鑑賞を通して児童の創造的な資質・能力を育成し、豊かな情操を養うことで人格形成に寄与するものである。表現の活動は、自分のイメージを持って材料や用具に働きかけ、絵を描いたりものを拵えたりすることと、自然や作品など周囲の対象や事象に関心を抱くことやつくられたものの表現の意図を探ろうとする鑑賞の活動などである。

図工科では、表現や鑑賞の活動を通して造形的な見方や考え方を働かせ、形や色などと豊かに関わりながら情操を養い、人格形成を図ることを目標の礎としている。児童が主体的に様々な対象と関わり合い、図工科指導要領の分類上の「A 表現」や「B 鑑賞」などの題材を通した造形活動から未知の創造性を見出し、掘り起こしていく過程に教育的価値がある。何かを見る、感じる、描く、つくるといった感覚や身体活動の連続で、「表出・表現をしてみても初めて気付く自分」に出会う体験を重ねていく。普通教育における造形的表現活動には、材料や用具を媒介しイメージを具体化・対象化することや、鑑賞活動を繰り返していくなかで、創造性が育まれていくということが希求されている。

今回の題材は中学年「A 表現」(1)イ「絵や立体、工作に表す活動」に基づくパッケージデザインという工作的内容である。

図工科の感覚的な要素が顕著に現れている〔共通事項〕の文面には、中学年の項目に、「自分の感覚や行為を通して、形や色などの感じが分かること。」「形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。」とあり、その指導に当たって、児童が体験的に対象の形や色などの感じが分かる、感じが生まれるような材料・用具を多様に用いて、感覚を働かせながら、それらに興味や関心を持って取り組むことや、自分でじっくり考え、材料に触れて自分のイメージを探究することの重要性が述べられている。

3-3) 国語科との関連

『小学校学習指導要領解説 国語科編』(2017)の教科目標「知識及び技能」の内容では、「オ 様子や行動、気持ちを表す語句の量を増やし、語や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解して、語彙を豊かにすること」とある。語彙の量を増やすだけでなく、実際に使えるようにすることで知識が自分のものとして定着していくと考えられている。また、情報の扱い方に関する事項では、目的を意識して必要な語句を判断することを示している。これは、調べ学習を行う場合にも、題名や目次、索引などを駆使して求める情報を探す際に必要となる能力である。我が国の言語文化に関する事項では、文字の組み立て方の理解や字形を整えて、読み手が分かりやすい文字を書くことが求められている。文字がもつデザイン要素に意識を向ける大切さを込めているのであろう。言語活動は、作品に用いる文や文字の形、伝え方などの表現の面で基礎となる能力であることから、「他教科との連携を意識すること」が述べられている。「思考力・判断力・表現力等」の項目には、言語活動例に、行事の案内やお礼の文章などを書く

ことを通じて、こちらの思いを読む相手に伝えるための内容や、詩や物語などをつくるなど、自分の思いを大切にしながら創造的な表現をすることの楽しさを実感させることの重要性が記されている。

対象児童は3年生の時に、図工科でつくった作品をみどり祭（学園祭）に展示するための案内ポスター制作に取り組み、作品写真とともに「キャッチコピー」を併記して、来場者が展示に足を運びたいような気持ちを誘発する情報伝達力の育成を目指した授業を行った経緯がある。（2022）ここでの学びは、本実践でのキャッチコピーの扱いにおける下地の一面となっている。

キャッチコピーについて

キャッチコピーとは、宣伝文句や煽り文句となる文章のこと。読み手の好奇心を刺激し、行動を起こすような情報を入れる。ここには、国語科で目指している美しく丁寧な文字を書くことだけでなく、例えば1m離れてもわかりやすい視認性を持ち、人を惹きつける書体や大きさ、太さ、イメージに合わせた配色をも含めて、図工科と文字や言葉というデザイン面での関係性が期待できる重要な点が含まれる。キャッチコピーのコツとして、①問いかける、呼びかける、②数値を入れて具体的にする、③短く言い切る、④気持ちを入れる、⑤言葉を楽しむ、などが挙げられる。

パッケージデザインには言語との密接な関わりがある。感受性や思考を外化するための言葉は、「すっきり」や「もちもち」などのオノマトペの他に、デザイン用語として知られる「シズル感」は、ステーキの肉汁が滴るなど、味覚に働きかけるニュアンスを意味するsizzle（英）に由来し、商品のアピールとしてなくてはならないものなどがある。日常でよく触れるこうした多様な言葉づかいを、言語に親しむための一環として、児童は感性を働かせて扱えるようにしたい。

3-4) 社会科との関連

『小学校学習指導要領解説 社会科編』（2017）では、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする〔中略〕目標のうち、「学びに向かう力、人間性等」の涵養の文言には、「これまでの学習を振り返り、学習したことを確認するとともに、学習成果を基に、生活の在り方やこれからの地域社会の発展について考えようとする態度」の育成が挙げられている。

3年生時には、「はたらく人とわたしたちの暮らし」の単元で、地域で様々な仕事に関わる人々と生活との繋がりを学習している。スーパーマーケットの商品の流通や、陳列の仕方、売り場などの様子の調査を通して生産者と消費者の関連性を理解してきた。また、社会科との接続が重要な意図である1・2年生時の生活科の学習では、「まちたんけん」などを通じて近隣の施設や商店などに出向き、仕事に従事する人の様子を調べたり、それをもとに成果を発表したりして社会との接点を理解してきた。

4年生では、自分たちの県の地理的環境の概要を理解することや、47都道府県の名称と位置を理解すること、などがある。「主な産業の分布」に着目する項目では、全国的に見て生産量の多い産業やその地域の特徴ある産業などの分布について調べる。自分たちの県の地理的環境の概要を理解し、47都道府県の名称と位置を理解するために、地図帳から位置

や地形を読み取り、名称や位置を確かめながら白地図にまとめる技能が身に付くようにする。「健康なくらしとまちづくり」の単元では、資源ごみの処理の仕方に着目し、リサイクルへの取り組みと、それを進める上で人々の労働についてを学ぶ。紙パックは資源ごみとして再生されるという事象を捉え、リサイクルすることは社会生活において資源活用という点で重要であること、社会科以外でも生活の中での学びとして自然に認識されている。

以上から、産地などの知識と表現がデザインとの関わりを生み、地理や気候などの特徴から視覚イメージが喚起されることが考えられる。なお、世界の中の日本として地球上の位置関係や、日本の国土の具体的な地形や気候、産業や工業については5年生で学ぶことになるが、かんきつ類は温暖な気候を条件に生育することを日常生活の中でも見聞きしているため、一定数の児童は生産の盛んな地域をイメージでき、表現に取り込んでいた。

「内容の取扱いについての配慮事項」では、問題解決に向けて学習課題を設定し、解決のための表現活動及び作業的活動としてアピール文の作成や新聞づくり、モノづくりなどを行っており、自らの目を働かせ、手を動かして創造する活動に、社会科の学習と図工科との共通点を見出すことができる。これらの活動には、情報活用能力そのものといえ、学校図書館やインターネット等から有益で確かな情報を検索し収集や整理をする能力の育成を担う大切な点である。

3-(5) 外国語科との関連

初等部では1年生より英語科の授業を行っている。聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの活動から、今回の授業実践では「書くこと」を主な活動として扱ってきた。『小学校学習指導要領解説 外国語編』の「書くこと」の目標のうち、「イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、〈中略〉簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。」とあり、小学校の外国語においては、大文字と小文字の活字体を書くことができるようにすることを目標のひとつとして示す。参考となる書き順を示し、読み手が分かりやすいように丁寧に書かれた文字を学び、コミュニケーションを行うために文字を書くことを大切にしている。言語の活用はコミュニケーションの手段であるが、それ自体が学習の目的ではない。「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図工科など、他の教科等で児童が学習したことを活用したり…」と教科横断的な内容が指導事項に示されている。

3-(6) その他の教科等との関連

算数科との関わりでは、数学的な見方・考え方における「図形」領域として、展開図や立方体の面や頂点の要素の知識及び数字や%などの記号の表記が考えられる。理科については、太陽と影の変化の関係や、気温、水など、自然の事物や現象への視点が関連している要素と見られる。総合的な学習の時間では、「探究的な見方・考え方をはたらかせて、横断的・総合的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成」に基づき、例えば4年生で学習し、みどり祭で発表した「環境学習」の経験を生かすなど、多面的な関わり方ができる。

4. 題材実践における検証

4-1) 研究対象

初等部在籍の4年生90名（1クラス30名）の学習経過及び、作品を提出した児童から4名（女子2名，男子2名）を選出した。検証としてパッケージデザインの題材の表現を基にした制作の経緯と制作後の振り返りにあたって記述したワークシートの内容による一連の造形表現活動を主対象とした。4事例の選出にあたっては、他教科等の学びの関わり合わせ方や、表現における材料や用具の扱いに見られた工夫、制作後のワークシートの記述に具体的内容が読み取れた児童から選んだ。

4-2) 倫理的配慮

本研究は、調査の趣旨を記載した文書を学校長と担任教諭に提示し、承認を得てから対象児童の同意と保護者の承諾を得て行った。

4-3) 題材について

①題材名 「おいしいを伝えよう！パッケージデザイナー」

②実施時期 2023年12月1日、8日、15日

③題材の目標

・オレンジジュースのパッケージをデザインするというテーマをもとに、社会や他者に自分の感じたことや思いを伝えるための発想や構想を働かせ、表現することでデザインの意味や役割への関心を持ち、他教科等を生かして、幅広い場面で活用できる汎用的な資質・能力を育成する。

・表現したいことを見つけ、画用紙や色鉛筆、カラーペンなどの描画材についての知識や経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫するとともに、これまで培ってきた様々な教科等の学びを生かし、作品の造形的なよさや面白さ、美しさなどを考え、進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組む。

④題材の評価

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 自分の感覚や行為を通して、形や色などの組合せによる感じが分かっている。 社会に流通するパッケージデザインの特徴を感じ取る。 形や色などの性質を理解し、用具や材料を適切に扱うとともに、紙類やペンなどの描画材についての知識や経験を生かし、手や体全体を十分に働かせて、表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。 他教科等の知識や技能を生かすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 形や色の組み合わせによる感じをもとに、自分のイメージを持ちながら、自分たちの作品の造形的なよさや面白さ、美しさ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている。 他教科等の学習を生かし、自分のイメージや考えや探求し、表現を工夫することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> パッケージデザインの表現を通し、つくりだす喜びを味わい、色画用紙などの紙類や描画材で、自分のイメージに基づいた表現をしたり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。 他教科等の学習を生かし、自分の学びから何ができるかを考え、表現を通して意欲的に取り組もうとしている。

⑤学習計画 全6時間

材料と用具：ワークシート1～3、画用紙、油性色鉛筆、水彩色鉛筆、カラーペン、のり

時	主な学習活動(○)	教師の支援(●) 評価規準(☆)
1	<p>【導入】 ○他教科等の学習を生かすことを意識してオレンジジュースのパッケージデザインをつくる活動に取り組むことの説明をする。</p> <p>【展開1】 ○生活の中にあるパッケージのデザインを想起し特徴的な表現を参考に自分のイメージを探る。</p>	<p>●商品パッケージの意図とデザインとの関連性を考えさせる。理解を深めるための説明。 ●他教科を生かすかことを踏まえたデザインのイメージを考えられるよう支援する。 ●配色カードを使いながら言葉にフィットする色を見つけることを提示する。</p> <p>☆(知・技) (思・判・表) (主体的)</p>
2 3	<p>【展開2】 ○パッケージデザインのイメージを考える。 ○イメージをワークシート1にアイデアスケッチとして表す。 ○アイデアスケッチをもとに、画用紙に構想を描く。</p>	<p>●画用紙を配布し、パッケージの折り方や切り方の留意点を説明する。 ●画材の使い方や文字の表現を見ながら適宜指導する。</p> <p>☆(知・技) (思・判・表) (主体的)</p>
4 5	<p>【展開3】 ○描画材は色鉛筆やペンを基軸として表現を重ね、作品として仕上げていく。</p>	<p>●組み立ての確認をする。 ●作品の全体感を確かめるよう適宜指導する。</p> <p>☆(知・技) (思・判・表) (主体的)</p>
6	<p>【まとめ】 ○ワークシート2・3に振り返りを行う。</p>	<p>●ワークシート2・3に補足をして理解を促進する。</p> <p>☆(思・判・表) (主体的)</p>

4-(4) 描画の発達段階

4年生は、9～10歳の学齢期にあたり、児童画発達段階の諸説のうちV.ローウェンフェルド(V.Lowenfeld)の発達段階研究における描画の分類では第4段階の「写実的傾向の芽生え(9～11歳)」に該当する。この段階の特徴として、様式から離れ、描く対象に対応した線を描き、細部まで踏み込んだ描画ができるようになる。色の扱いについては、色の象徴的意味を理解し、配色を意識して描く、とされる。心身の成長に伴って客観的な思考が高まり、それまで描いていた主観的な世界から、現実には自分の目で見える世界を描こうとする特徴と、知的能力の発達に伴った観察力や判断力が高まる。正確に再現的な表現を行おうとする傾向がみられる反面、自由な発想で描くことが減少していく、と学説上は区分されるが、社会の変化や背景、生活習慣など様々な影響により児童は連続的かつ動的に変化していくので、すべての言説の適用は当てはまらず、相応に個人差がある点には留意が必要である。

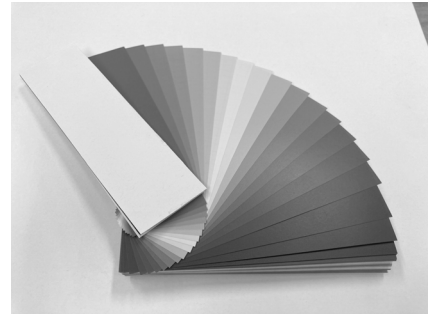
4-(5) 創造性を高める用具としての画材

a. 新配色カード129a【図3】

イメージを想起し、アイデアを描き出すプロセスについて、まず事前ワークシート1に表現に活用できそうな言葉を想起し、同時にその言葉を色に置き換えたらどのような色が

思いつくかという、言葉と色とを結びつける活動から始める。その際に新配色カードを活用した。

これは、4年生になって配付した用具である。仕様は、ビビッドトーン、ディープ、ダーク、パール等の有彩色8トーンと、各12色相、無彩色9段階を掛け合わせて生成される129色を、34×120mmの色紙片に束ねたものである。豊富な数の色相を視覚で認識することで、主体的に色と関わり、彩色時の配色を考えることが可能になる。ある程度の英語の知識があれば色名も理解でき、どの色が含まれているか組成が分かるため、色彩における意思を共有できる役割がある。様々な色のカードを眺め、色彩感覚が刺激を受けるとともに、使いたい色を探ったり、未知の色と出会ったりしながら、配色を考える用具として扱うことが多い。今回の題材で使用する色は黄色～オレンジ系統が多いため、主にその周辺の色相をメインカラーとし、サブカラーにどのような色を持ってくるとより視覚的に有効かという比較や思考を磨くツールとして活用している。図工科指導要領では「多様な材料や用具の経験があり、表したいことに適した材料や用具を選んだり、表現方法を組み合わせるなどこれまでに身に付けた技能を生かして表す姿」とあり、児童が過去の体験で得た知識と材料や用具との組み合わせによる新たな技能の形成の重要性を示唆している。



【図3】

b. 2種類の色鉛筆【図4】【図5】

いわゆる一般的な色鉛筆として流通する油性色鉛筆【図4】は、顔料を油性のワックスで練り固め、筆圧に応じて着色の濃度を調節できる。強く塗り込むと光沢のある濃厚な発色が見られる。水彩色鉛筆は、親水性の溶媒で練り上げた顔料を細長く固めた芯を鉛筆軸で挟んだ色鉛筆である。油性とは異なり、描いたところに水を含ませた筆などで水を加えると、顔料が溶け出し水彩で描いたようなタッチを表現できる【図5】。画用紙の表面は粗

油性色鉛筆のテクスチャー



【図4】

油性色鉛筆を塗った表面

水彩色鉛筆のテクスチャー



【図5】

水彩色鉛筆を塗り、
水で溶かした表面

目のため、色鉛筆の着色ではラフなテクスチャーとなるが、水彩色鉛筆の着色面を水で溶かした表現はテクスチャーを平滑にし、水彩画のような表情になる効果を生む。こうした用具を可能な範囲で児童に出合わせていくことで、表現意欲の向上が見られ、多様な画材を扱うスキルアップに繋がっていく。指導者はこうした機会を意図的に設け、児童の表現力を育てる鍵を与えることができる。

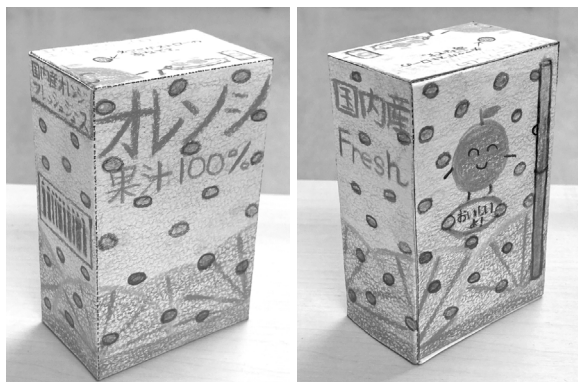
5. 授業実践の結果

ワークシートから抽出した回答の概要

- ①デザインで特に大切にしたこと
- ②キャッチコピー
- ③活用した教科 ※総合的な学習の時間は「総合」と略す。

5-1) 児童の表現

児童 A



【図6】

- ①リアルに、鮮やかでインパクトのあるデザインを目指している。
- ②国内産 Fresh
- ③国語、社会

児童 A の作品【図6】は、エスキースの段階から、組み立てたパッケージをイメージして捉え、前面から周囲4面にオレンジの輪切りが連なるように配置されている。鉛筆と油性色鉛筆のみを使用し、比較的強い筆圧で重ねるように描画表現していることで濃厚なオレンジ色の発色が目を引く。キャッチコピーには「国内産」「Fresh」「おいしいよ」の文字の他、クイズが天面に書かれ、とりわけ自分と同じ若年層の消費者への意識が向いていることが窺える。制作前のワークシートでは、ほぼ完成品通りの見通しのイメージを持ち、立方体の組み立て方にも丁寧さが見られ、一連の活動に高い意欲を持って取り組んでいた。

児童 B



【図7】

児童 B の作品【図7】は、前面に比較的珍しい色の選択であるピンクを生かし、斜めのストライプを施している。まず油性色鉛筆によるオレンジの果実と断面が中央に濃厚に描かれ、野山を想起させる緑と白い雲のうかぶ青空が薄く施されている。背面にはピンクのストライプと、「おいしいみかん使用!」との文字が水彩色鉛筆で描かれている。溶かす水量を調整し色の濃淡を味わいながら表しているタイプの類型とした。

社会科の知識から、和歌山県のみかん生産量に着目したとみられる。また、原料はみかんであるが、他教科等を生かす視点から装飾性も意識して英語で Orange と書き入れている。

①昔から画家の絵をかくときの技能を見てかいていたので、それを思いだしてみました。

②おいしいみかん使用!

③社会、英語

児童 C



【図8】

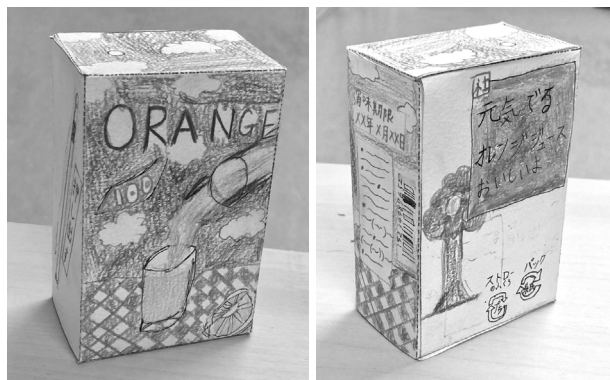
【図8】児童 C は丁寧な描写やキャッチコピーの表現など、全体感のバランスを考えて制作しているタイプの類型とした。「この味 みんなにとどけ」という言葉は普遍的でシンプルな印象だが、短くさわやかな歯切れや、おいしさを伝えようとするメッセージ性が作品全体から感じられる。透明感のある淡彩と濃厚なオレンジの描写でみずみずしい全体感が醸し出されている。オレンジの果実と葉の緑色が調和し、シンプルな構成がパッケージとしての価値を高めている。

①甘さ、新鮮さ、見た目のデザイン

②この味、みんなにとどけ

③国語、社会、算数、総合（社会で学んだ紙のリサイクルの記号を入れた。）

児童 D



- ①甘さ、新鮮さ、見た目のデザイン
- ②元気である オレンジジュース
おいしいよ
- ③国語、社会、算数、総合

【図9】

【図9】児童Dは自分の理想やこだわりを追求し、オレンジジュースが食卓に置かれた風景を前面に描いている。日常を下敷きにした想像力をもとに、油性色鉛筆で彩度の高い色彩を施したり、文字を細かく書いたり、側面から天面にも細やかな感性を働かせ、丁寧に表現できた。テーブルクロスにあるタータンチェックの模様や、コップに注がれるオレンジジュース、背景の青空や雲は、さわやかな朝を連想させる。作者は、国語、社会、算数、総合を生かし、積み上げた知識とビジュアル効果のバランスを考えて表現していた。

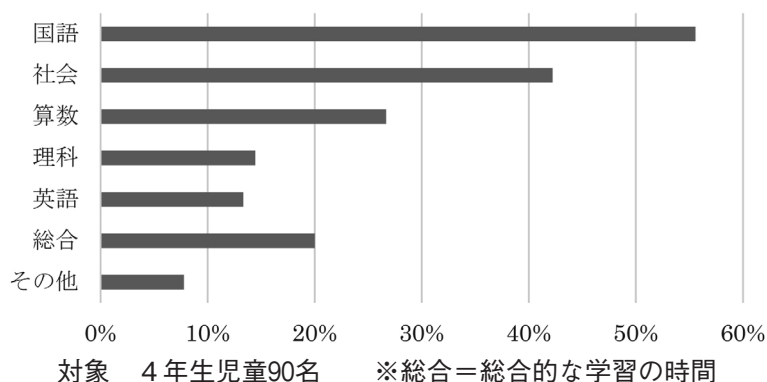
5-(2) ワークシートによる振り返りの結果

児童がどのような感性を働かせ、表現してきたかを、作品のみではなく、制作前と制作後に実施したワークシートへの記述内容と照らし合わせて検証を行った。

回答の表示については、内容が同種と判断できるものは本研究の有効性を考え、まとめるように配慮した。

ワークシート2

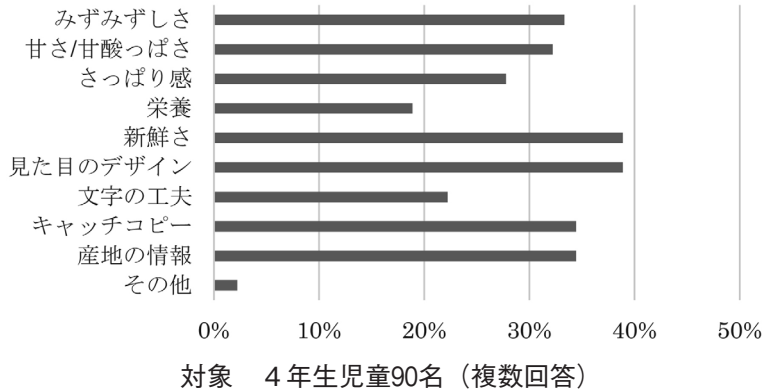
【表2】 活用した教科等



【表2】は、本研究の中心となるアンケートのひとつである。発想から完成までの様々な

プロセスで、他教科等の学びを意識して表現する過程で、作品に表したことだけでなく、デザインを考える手掛かりにしたことも含めて回答するよう伝えた。

【表3】 デザインで特に大切にしたこと



【表3】の回答は、栄養や文字の工夫の項目以外には極端な偏りは見られず、制作時は様々な要素をデザインの一部として考えていたことがわかる。パッケージが立方体ということもあり、イメージをもとにそれぞれの面に意味を与え、「見た目の全体感」として総合的なデザイン性を捉えることの大切さへの意識が窺われる。

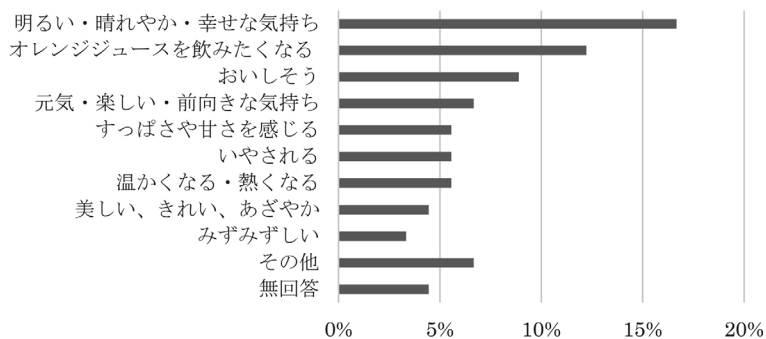
【表4】

キャッチコピー（抜粋）

- ・飲むと元気がわいてくる
- ・栄養満点
- ・元気をあなたに
- ・自然の恵み
- ・元気いっぱい
- ・これ飲んだらハッピー
- ・さあ本物のオレンジへ
- ・最高のオレンジ
- ・飲んだら止まらない！
- ・神のしずく
- ・くせになるおいしい味
- ・Fresh!! Tropical
- ・ごうかな一口
- ・元気が出るオレンジジュース
- ・よい果実はよい畑から
- ・心を込めて作りました
- ・飲んだら止まらない
- ・世界一のうまさ
- ・この味みんなにとどけ
- ・あまずっぱーいオレンジ
- ・フレッシュあなたのそばに
- ・君の心をおどらせる
- ・あなたの笑顔をつくるよ
- ・果汁100%、あなたもぜひ！
- ・ビタミンC豊富！おいしすぎてびっくり！
- ・国内産 Fresh！

【表4】作品に用いたキャッチコピーの回答である。元気や笑顔など、手に取った人が明るく前向きになれるような期待や思いを込め、「短く、リズムよく、心に届くメッセージ」であるキャッチコピーの特質を理解して、様々な個性が感じられるものが並んだ。

【表5】 オレンジ色を見るとどんな気持ちになりますか



対象 4年生児童90名（自由記述）

【表5】はオレンジ色に対するイメージ調査である。一般的に赤、オレンジ、黄色系統は暖色に分類され、暖かくポジティブな色の印象が心理作用と関係していることがわかる。当然ながら、題材の内容からオレンジやみかんという具体的な対象を想起した時の飲みたくなる、食べたくなるという食欲の喚起が心理面に影響している。それ以外は「どんな気持ちになるか」という質問に忠実な回答を挙げており、そのほとんどが形容詞や気持ちなど抽象的な要素をイメージしている。

【表6】 なぜ、図工でも他の教科での学びを生かすことが大切だと思いますか

〔ワークシートの記述より〕

《全教科の重要性》

- ・すべての授業はつながっていると思うから。
- ・図工は全部の教科が合わさってできたものだから。
- ・すべての教科が大事だから。
- ・自分の可能性を広げることだから。
- ・図工の授業でも他の教科を学べるから。
- ・社会を知ることができるから。

《作品の質を高める》

- ・色々な教科で習ったことを合体させると、お客さんをひきつけることに成功するから。
- ・生かすとより美しくなるから。色々な技術で作品をよくするため。
- ・その方が見た目でおいしさを伝えられるから。
- ・いい作品のためには色々な能力を使った方がいいから。
- ・一つだけの技能で作品を成功させても作品が魅力的にならないから。
- ・いろいろな形で伝えたいことを伝えられる。わかりやすく相手に伝わりおいしそうと感じてもらえる。
- ・作る技術は世界に広がることだから。

《学びの繰り返しの重要性》

- ・図工で色々な教科の知識を生かすことに慣れると、他の教科で使えるから。
- ・過去の学習を復習することになるから。
- ・使わないと意味がないから。使うことで知識を忘れなくする。
- ・色んなところで使っていると体にしみつくからいつまでも忘れない。
- ・生かすと忘れていたこともふり返れるから。

※文意を保つことに配慮し筆者が文字表記を調整した。

【表6】は【表2】と関連し、本実践の要点となるアンケートである。様々な意見をもとに、3種類に分類した。

《全教科の重要性》の群は、あらゆる教科の学習はそれぞれに意味があって、互いに繋がりが影響し合っていることの大切さを挙げたグループである。《作品の質を高める》の群は、作品のヴィジュアル面に焦点を当て、その質を向上させるように他教科等の学びを活用することが大切であるなどの意見を述べたグループである。《学びの繰り返しの重要性》の群は、習得した知識や技能はそれだけで働かないので、繰り返し使うことで学びとして定着することを述べているグループである。

6. 総合考察

以上の結果を踏まえ、今回の実践についての考察をする。作品の完成後、学習のまとめとして「学習ふり返しカード」というワークシートに、授業の振り返りや感想などを記述させた。それらをもとに総合的に検討し、成果や課題、授業を通して明らかになったことなどを次のようにまとめた。

児童が一連の表現活動で何をどのように考え、感じ取ったかについては、すべてのワークシートの結果を踏まえて以下の通り見取っていく。

ワークシート1は、想起したイメージを可視化し、整理していくためのものである。ここでは、他教科等の知識や技能をどう生かすかよりも、自分自身の内面を見つめ、作者としてどのように制作したいかを探ることで、発想の具体化に向ける意味を持たせた。「オレンジの味やにおいをイメージした時に浮かぶ言葉や色のイメージ」という質問には、さわやか、あまずっぱい、ナチュラル、フレッシュという意見が並んだ。色については、手持ちの配色カードの中から黄色やオレンジ系統を選ぶことは当然として、ライトブルーやブライトイエローグリーン、サーモンピンクなどを選択する児童が一定数見られた。胸中にぼんやりと浮かぶ微妙な色を配色カードの中にある色と照らして近いものを選び、自分で確認したり他者と感覚を共有したりすることができる配色カードの利便性が認められた。また、色鉛筆でワークシートに着色したり、色名を英語で記したりすることは、知識や技能を深めるのに有効であった。

【表2】は、ワークシート2「どの教科を活用したか」の回答にある通り、言語活動としてのキャッチコピーが国語科の知識や技能を活用したメインの表現であったことから、選択が最も多い教科となった。また、度重なるワークシートの記述にもほとんどの児童は抵抗感を示さず取り組めており、内面を書き出すことに専念していた。こうしたことを習慣づけていくことで、芸術分野における言葉の大切さを実感していくのではないだろうか。今後も言語活動への意欲を高める機会を与えて、最適なワークシートの教材化を行いたい。

①「図工以外にどの教科の学習を生かしたか」という質問には、活用した各教科等を複数回答可で選択させた。選択肢の「国語」が最も多かったが、上述の通り、キャッチコピーや品名の表記への関連付けが見られた。「社会」については、47都道府県の知識や、資源ゴミとリサイクルに関する学習の成果が見て取れた。活用の仕方として、「国語と社会の知識を思い出してえがいた」という回答が複数あり、今回の題材との親和性が窺えた。

②「ジュースのデザイナーとして特に大切にしたこと」の質問は複数回答可である。結

果として、「見た目のデザイン」の回答が最多であった。これは「総体としてのパッケージデザインへの意識」そのものを指すのであろう。様々な教科や自身の経験値をパーツとして扱いつつ、思考から行為を網羅するデザインの総体として再編成してきたことへの自己評価もあるのではなかろうか。他には、キャッチコピーや産地の表現に関するものや、オレンジのもつ新鮮さ、みずみずしさという品質の価値を重要視する回答も多かった。商品として品質を重視することは当然であり、美しさや関心を引くデザインを考える図工科本来の活動に重点を置いた視点であろう。

ワークシート3では、ワークシート2と関連させて詳細に記述できる質問を設けた。

【表6】①「なぜ図工でも他の教科の学びを生かすことが大切か」の質問は、教科横断的視点が大切であるという立脚点が前提となっており、研究の核心に迫るものであるため、最も期待した設問であった。児童の回答からは様々な意見があったが、その様子がよく表れている声を取り上げ、3種類に分けた。《全教科の重要性》の群は、あらゆる教科の学習はそれぞれに意味があること、互いに繋がり影響し合っていることの大切さに気付いた回答があった。ここには、教科横断的な学習の本質に着目している児童の内面を窺い知ることができる。《作品の質を高める》の群は、作品の出来栄に焦点を当て、その質を向上させるように他教科等の学びを活用することが大切であるなどの意見を中心に、図工科の授業だけでよい作品がつけられるものではないということ分かっている回答群と見られる。

《学びの繰り返しの重要性》の群は、習得した知識や技能はそれだけで働かないので、繰り返し使うことで学びが定着し深化するという学習理論の基本を分かっており、自分でそれを分析しているグループであると読み取れる。この回答の持つ視点は、今後すべての学習者にとって非常に重要な示唆としてあらゆる教育活動に醸成されていくことが求められる。

【表4】「キャッチコピーの表現」では、多くの回答から、デザインにポジティブな印象を与えようとする意識が見られた。元気や笑顔など、手に取った人が明るく前向きになれるような期待や思いを込め、「短く、リズムよく、心に届くメッセージ」であるキャッチコピーの特質を理解して、様々な個性が感じられるものが並び、オレンジの風味を想起させる言葉選びの感覚を見て取ることができた。

【表5】「オレンジ色の印象」という観点についての設問である。暖色系は感情的な興奮をもたらすといわれるが、「明るい、晴れやか、幸せ」など前向きな気持ちになることは、意欲的に制作する児童の姿からも見取ることができた。

以上のことから、図工科における造形表現と他教科等との関連性は、児童が自身の学びを振り返り、引き出し、繰り返し使うことで目的の母体は多面的にふくらみ、さらに日常生活での体験から得た様々な知識を活用していくことで学習全体が豊かに広がる可能性を持つという点が明らかになった。

成果と課題

本研究では、パッケージデザインの表現を通し、そこに他教科等の学習を関連させることで、児童が自分の知識や技能等の様々な能力や経験値を主体的に働かせ、作品として生み出す実感をもとに、総合的なデザインへの意識と創造性の育成の可能性について検証し

てきた。そして、題材設定からイメージの生成や構想、表現から振り返りという行為の連続性から、あらゆる教科等に内包されている共通性と融合性を意識して活用するための方法を探究したその成果と課題について考察した。

実践の成果としては、「他教科等との関りを意識するだけでなく、実際に作品の中で既知の学びを生かすことにより造形的表現力の向上が多く見られたこと」「ワークシートの活用は、児童の内面を浮かび上がらせ、客体化した情報として認識することが授業改善の面で有効であること」が挙げられる。こうしたことから、本研究については一応の有効性が確認されたといえる。そして、児童期のみずみずしい感性を創造的に生かし、社会や他者に想像力を向けることで、大きな社会と繋がる一人の人間としての自己有用感の醸成が認められた。一連の実践が一時的な試みに終わらず、今後に向けて教科横断的な題材計画や、ワークシートなどの教材の開発と研究が課題となった。

引用文献

- 「新しい学習指導要領の考え方 ―中央教育審議会における議論から改訂そして実践へ―」
2017 文部科学省
- 「STEAM教育等の各教科等横断的な学習の推進について」2021 文部科学省
- STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進 2021 文部科学省
- 『新潮世界美術辞典』1985 新潮社 p.976
- 福井晃一編集『デザイン小辞典』1978 ダヴィッド社 p.8
- 吉岡竜吾・栢森和重「教科の枠を越えて活用できる力の育成 ―【考えるための技法】に着目して―」2021 三重大学教育学部研究紀要第72巻 p.441-455
- 高橋智子・村上陽子「特別支援学校(知的)における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践 ―日本の美術作品(屏風)に着目して―」2021 教育開発学論集第9号
- 石川美穂「色づくりから自分づくりへ ―教科横断を視野に入れた生徒の自己有用感の醸成―」2020 宮城大学教職大学院
- 蛭名敦子「鑑賞教材『地域から世界への視点』の実践的考察」2010 美術科教育学会誌31巻 p.113-123
- 「世界の統計 オレンジ類の生産」2021 帝国書院
<https://ict.teikokushoin.co.jp/statistics/W21.xhtml> (参照日:2023-12-24)
- 「令和4年度みかんの結果樹面積、収穫量及び出荷量」2023 農林水産省
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyo/sakumotu_kajyu/mikan/r4/ (参照日:2023-12-24)
- 佐藤洋照・藤江充・楨野匠 編著『図画工作実践ガイド』2019 日本文教出版 p.13
- 熊谷優香「第3学年国語科学習指導案」2022 鎌倉女子大学初等部
- 「ポスター制作について」2022 Wailea DESIGN
日本色研事業株式会社の製品
- 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2017 文部科学省
- 『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省 2017
- 『小学校学習指導要領解説 社会編』文部科学省 2017
- 『小学校学習指導要領解説 算数編』文部科学省 2017
- 『小学校学習指導要領解説 理科編』文部科学省 2017

- 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』文部科学省 2017
田村学 編著『小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』2017 明治図書
Victor Lowenfeld 著・竹内清・堀内敏・武井勝雄 訳『美術による人間形成—創造的発達
と精神的成長』(Creative and Mental Growth) 黎明書房 1963

参考文献

- 永田泰弘・三ツ塚由貴子 編著『よくわかる色彩の科学』ナツメ社 2007
中山司・濱田信義・大森裕二 共著・Far.Inc 編『色彩デザイン見本帳』MDN コーポレー
ション 2005
佐藤卓『塑する思考』新潮社』2017
佐藤卓『大量生産品のデザイン論』PHP 研究所 2018
B・M・FT ことばラボ『シズルのデザイン』誠文堂新光社 2017
瀬戸賢一 編・味ことば研究ラボラトリー『おいしい味の表現術』集英社 2022
菱山覚一郎・廣嶋龍太郎 編著『第3版 社会科の理論と課題』明星大学出版部 2017
柴田義松・阿部昇・鶴田清司 編著『あたらしい国語科指導法 (五訂版)』学文社 2020
今井むつみ・秋田喜美 (編著)『言語の本質』中央公論新社 2023
河鱈実之 監修『しらべよう! 47都道府県のくだもの』汐文社 2018
農研機構・果樹研究所・長谷川美典 監修『日本の農業4 果物を育てる』岩崎書店 2010
井上繁『47都道府県・くだもの百科』丸善出版 2017
クラリッサ・ハイマン 著・大間知知子 訳『オレンジの歴史』原書房 2016
ジル・デイヴィーズ 著・八木恭子 訳『カラー図鑑 果物の秘密 利用法・効能・歴
史・伝承』西村書店 2022
日本果樹種苗協会/農業・食品産業技術総合研究機構/国際農林水産産業研究センター 監
修『図説果物の大図鑑』マイナビ出版 2016

要旨

本研究は、図画工作科の学習活動と他教科との関連性に焦点を当て、「パッケージデザイン」という題材の一連の表現活動について、その教育的可能性を実証することである。4年生の児童を対象とし、題材の表現過程と、ワークシートによる作品鑑賞及び自己評価等の内省を通じて、他教科での学びの活用状況を把握した。その結果明らかになったことは、日々、どの教科の学習にも主体的に探究心をもって学習に臨む児童は、図画工作科の造形的表現でも、これまでに得られた知識や技能をもとに諸能力を活用し、相互に関わらせながら、他者や社会を意識した客観的な視点を築き上げて、造形表現にとどまらないデザイン能力を働かせて、学習を展開させていることが認められた。

(2024年1月4日受稿)